

栗木京子短歌「戦争詠」の源流とその特質

草木美智子

一、はじめに

栗木京子短歌における特質の一つは「社会詠」であり、その種類は多いが、その中でも目立つのが「戦争詠」である^①。その数は、全一〇歌集で二八七首（七・三％）あり、特徴は歌材として「家族」が詠まれている点^②が挙げられる。特に「伯父」、「祖母」の歌が目立つが、その他、父母、祖父、叔父、子（息子）、夫の歌も詠じられている。小考では、「家族」と「戦争」が一首中に歌われた作品を抜き出して、分析と考察を加える。具体的には、家族それぞれを章立てして考察し、そこから浮かび上がってくる事柄を指摘したい。さらには、そこに共通する特質を明らかにしまとめとしたい。考察の順序は、はじめに「祖母の詠」、「父母の詠」、「伯父の詠」の順で論ずる。特に「祖母」「伯父」を題材とした歌は、前者は第四歌集『万葉の月』に、後者は第五歌集『夏のうしろ』に収められ、栗木の「戦争詠」を考える上で看過できない歌集となっている。後半では、「祖父」「叔父」「夫」「子（息子）」の順で言及し、最終的には、栗木短歌「戦争詠」の源流とその特質について私見を述べる。なお、本稿における傍線等は、特に断わらない限りはすべて稿者による。

二、「戦争詠」と祖母

まず、「祖母」の歌を第四歌集『万葉の月』から挙げたい。

ほの白く祖母の供へし陰膳を思ほゆ垣に梔子咲けば

祖母の大島紬ひろげみてをり、心を紆けるといふ生き方のありし杳き日

子を幾たり無くせどすぐにまた産みて祖母の歩みし野あざみの生

(「官能ともる」)

この三首では、「陰膳」「子を幾たり無くせど」から、祖母には戦争中、出征した身内がおり、「陰膳」をしていたこと、またそれが「子」であったことが認められよう。また、栗木の伯父(母の兄)は出征中、南方の輸送船で二三歳で戦死した。三首の「梔子」、「大島紬」「野あざみ」に共通する季節は「夏」である。一首目「ほの白く」では、梔子の白い花が、戦時中の祖母が供えた「陰膳」を自然と思ひ起こされると詠む。和名「梔子」の由来は、実が熟しても口を開いて種子を散布しないことから、たとえ言う。そのことから、「梔子」は、「詩歌」では「口無し」とかけて言うことが多い。³⁾栗木は「梔子」が咲くのをみると、ただ静かに子の無事を祈り、「陰膳」を供える祖母の姿を想像するのである。

二首目でも、栗木が祖母の大島紬を広げ、祖母が遠い日に心を紆ける、つまり悲しみを表に出さないようにそれを封じ込めた過去を想い詠む。それが次の「子を幾たり無くせどすぐにまた産みて祖母の歩みし野あざみの生」へと連接していく。「野あざみ」は初夏に咲く花で、葉にとげがあり、身を守る。さらに、花が咲き終わった後は、タンポポの綿毛のように白い種子となり、遠くに飛び子孫を残すという。その野あざみの特性が、子を亡くしても次の子を

産み、強く生きていった祖母と重なるのであろうか。ちなみに、栗木が東日本大震災後に詠んだ歌に、

たんばの綿毛につかまり次々に母と子どもは西へ飛び立つ

西へ去る母子を包むや乳足らひてねむる仔猫のやうな温ぬくとさ

〔カレンダー〕

がある。これは、原発の影響から逃れるために避難する母子の様子を詠んだものだ。「野あざみ」の歌とは作歌時期と状況は異なるが、タンポポの綿毛のような姿で飛び、子孫を残す点と、避難する母子の姿が重なる歌である。異なるのは、戦争中の祖母には逃げることができなかつたという点であるか。その代わりに、祖母は子を残すことで生き抜いたのであろう。

次の三首は、「社会詠」が目立つ第五歌集『夏のうしろ』に収められている。

亡き祖母の時計はめれば秒針は雪野をあゆむごとく動けり

〔曲線〕

病む人らみな素顔にて怖かりき祖母を見舞ひしサナトリウムに

ねぢ巻けば動くおもちやを枕辺に祖母は置きをり置きて逝きたり

〔レモン〕

これら三首に共通するのは「祖母」「死」であろう。一首目では、亡くなった祖母の時計が、静かに雪野を歩くように秒針がゆつくりと動いたと詠む。さらに、雪を踏みしめながら歩く時の「ギュツギュツ」という音とリズムが、祖

母の時計から聴こえる秒針と似ていたことも表現しているのであろう。栗木の中で祖母は今でも生きているのである。二首目では、サナトリウムにいる祖母を見舞った日のことを詠む。本当に怖いのは、「素顔」を通して人間の「生と死」を敏感に感じ取ったからではないか。そして三首目では祖母の最期を詠む。「ねぢ巻けば動くおもちゃ」とは、祖母の子たち（伯父、母）が昔遊んだ思い出の品であろうか。戦争で子を亡くし悲しみを抱えながら生きたであろう一人の女性を、最期は子と一緒に過こし逝った「母親」として、孫の視点から詠んだ。これらの歌には栗木が、戦中、戦後を生きた女性、母、祖母を敬う姿が存在する。

次に、第六歌集『けむり水晶』（平成一八年、角川書店）で詠まれている「祖母」の歌を挙げる。

両の手を畳につきて泣きぬしは祖母なりしかな昭和の夏に

（「クレマチス」）

本小題も「夏」を連想させる「うなぎ」「クレマチス」の歌から始まる。そして、五首目の「水の上に落ちし椿は気付くべしいかにこの世は重たきものか」で雰囲気は変わり、「両の手を」の歌へと続く。「昭和の夏」とは、敗戦の日か、または子を亡くした日か。この歌からは「悲しみ」と同時に「無念さ」「悔しさ」が強く表出されている。この歌から続く作品群も挙げてみたい。

ゴム底を見せて干さるる長靴に被爆国ニツポンの夏の日は照る

八月の海の底にはスタジアムありぬ旗振る兵士に満ちて

するすると蛇寄りゆけり夏の日のひときはうつくし墓標へと

蟻よりも大きな雨粒地を打ちて蟻の宇宙は満ちあふれたり

あぢさゐが土になだれて咲くところ泣きじやくるとふ言葉おもほゆ

山越えて流るる雲よ祈雨と止雨つかざどりたる神ありきむかし

(「クレマチス」)

これら作品群に共通するのは「戦争」「夏」「雨」「水」「泣く」ではないであろうか。そして、それは「両の手を畳につきて泣きぬしは祖母なりしかな昭和の夏に」から続く。「山越えて」の歌では、「雨」が出てくるが、それは祖母が流した「涙」と重なるものがあるう。

最後に、第一〇歌集『ランプの精』（平成三〇年、現代短歌社）を挙げる。

戦死せし子に陰膳を今もなほ供へゐるべしあの世の祖母は

(「兵役免除」)

この歌にも「陰膳」が詠まれている。そして、すでに亡くなった祖母が、今でも「陰膳」を供え続けていると栗木は詠むのである。では、「戦死せし子」とは誰か。それは祖母の子（伯父）だけではなく、今の世界で戦死した子供にという意味なのではないか。つまり、現代でも、世界中で戦争は起き、祖母の子のように日々子供は亡くなり、祖母のように悲しみを抱える「母の姿」は絶えない。このことを栗木は表現しているのではないか。栗木の中では、今現在も絶えることなく継続されているといえよう。

以上が「祖母」の歌である。次に栗木の「父」「母」の歌について分析と考察を進める。

三、「戦争詠」と父母

まず、「父」の歌三首を挙げる。三首ともに第一〇歌集『ランプの精』に収められている。

復員せし父も聴きけむ身の芯をゆさぶるハリー・ジェイムスの音

〔団栗〕

「戦友」と父が言ふとき縮緬皺なして寄りにし昭和の時間

戦友に金貸す父を嘆きをり母はぎしぎし貝洗ひつつ

〔兵役免除〕

以上の三首に詠まれている「復員」「戦友」から、栗木の「父」も出征していたことが理解できる。「復員せし」の歌では、復員した父が当時人気だったハリー・ジェームスのトランプを現在の栗木も聴き、父を想い出す姿が詠まれている。戦地から帰ってきた「父」はどのような思いで聴いていたのか、娘の視点から詠まれている歌である。

次の「戦友」の歌では、「父」が「戦友」と言う時の懐古する表情が表現されている。さらに、「戦友に金貸す父を」からは、娘である栗木から見た「父」の性格と「母」の姿が対照的に詠まれているのが興味深い。栗木の父は、戦前は共同通信社に勤務していた。結核を患っていた同郷の幼馴染と結婚するが、その後妻は亡くなり、妻の死後も妻の両親を養っていたようだ。三十代後半で栗木の母と出会い、再婚したが、最初の妻の両親のことは二人が亡くなるまで養っていたという（栗木が生まれて間もなく二人は亡くなった）。そんな父を栗木は堀辰雄の『風立ちぬ』のようだとかかったことがあると言う。だが、インタビューで栗木は父のことを「殊勝な人」だと表現している⁴。このような話から、栗木の「父」は愛情深く、また人の頼みを断れない性格でもあったのであろうか。「戦友」が困ってい

るのなら、金を貸すのは当然のことだったのだ。しかし、それを「母」は嘆き、八つ当たりをするように激しく貝を洗う光景を娘は見えており、歌に詠んだのであろう。貝洗から出る音の喩は、母の思いを見事に詠じているといえる。

また、この歌の次は、「娘」の視点で詠まれている。それが次の一首である。

ケーキ持ちて金を返しに來し人の毛羽立つ背広をわれは怖れき

(「兵役免除」)

この歌には、父の「戦友」の苦境を「毛羽立つ背広」で、またそれを見る娘の心情が明確に表現されていると言えるであろう。

次に「母」の歌を挙げる。まず、一首目は、第五歌集『夏のうしろ』に収められている。

戦争の来るまへ少女期の母が「花物語」に読みし月見草

(「北限」)

この歌では戦争が来る前、後に戦死する兄がまだ生きていた頃の「母」の様子を詠んでいる。『花物語』は吉屋信子の代表的な少女小説であり、栗木の「母」も読んでいたのであろう。しかし、それはまだ平和で、「母」も少女だった時のことである。本歌集に続く第六歌集『けむり水晶』に次の歌がある。

春一番吹きくる苑に母は言ふ大空襲の夜の風向きを

(「方違へ」)

現在は「春一番」が吹くとニュースになるほど、「春」の到来を予感させるものとなっている。しかし、母は戦時中に体験した大空襲の夜の「風」を連想してしまうのである。それは空襲による大火が風向きによって左右されるから

であろう。

次に第八歌集『水仙の章』（平成二五年、砂子屋書房）の一首を挙げる。

戦国のをみなのごとし品川の桜を見つつ母と写経す

（「われも一束」）

この歌は、平成二三年（二〇一一）の「東日本大震災」発生後に詠まれたものである。品川の高齢者施設に入所している母と栗木は、三月の桜を見ながら震災の犠牲者を弔うため写経をするのである。震災は戦争ではないが、危機的な状況であることは同じである。戦国時代の女性たちのように、被災地から遠く離れている自身と母はただ犠牲者たち、被災者のことを祈りながら写経する。時代も状況も異なるが、今自身にできることを静かにする母と娘の姿が重なる歌である。

最後に、第一〇歌集『ランプの精』からも挙げたい。

カナカナのなくゆふぐれに老い母は「靖国に兄がゐるから」と言ふ

（「鯨とピノキオ」）

「カナカナの」では、年老いた母が戦死し、靖国神社に眠る兄（栗木の伯父）について述べている。「カナカナ」は「蝸」のことであり、「夏」の生き物であり、また短い命しか生きられない。「カナカナ」と二三歳で戦死した「兄」の短い一生を重ね、無念に思う妹の視点が表現された一首である。「ゆふぐれ」が敗戦を表現しているともいえるであろう。

四、「戦争詠」と伯父

次に伯父の歌を挙げる。なお、伯父の歌には、戦死した伯父を連想させる「復員兵」「兵士」も含めることとした。まず、第五歌集『夏のうしろ』から二首を次に挙げたい。

夏帽子振ることもらよ遺影なる伯父とことはに戦闘帽かぶる

竜胆の咲く朝のこの道を歩みつづける復員兵あり

(「北限」)

両詠ともに、一二歳で戦死した伯父(母の兄)について詠んでいる。特に二首目は、本歌集名と深く関わる詠歌であると言えよう。その点について、栗木は次のようにインタビューで述べている。

栗木

恐らく亡くなった伯父の中では、祖国っていうのは美しい竜胆の花の咲くふるさとだったと思うんですよ。そこをずっと還り続けていると思うんです。辿り着けないけれども、伊藤一彦さんが読売新聞の時評で取り上げて下さって。「この歌は現在形で詠んでいるところに力がある。迫力がある。今も還り着けなくて、ずーっと歩き続けているというところに作者の歴史観が表れている」と読んで下さって、すごく嬉しかったんです。浄化し切れない悔しさとか無念さというものは、情景が美しければ美しいほど際立つ、というようなところを何とか表したかったなあと本人は思っているんですが。

傍線部の通り、栗木は「伯父」が美しい「祖国」に辿り着けない悔しさ、無念さを表現するため美しい情景を詠んだ。

この「復員兵」の次の歌、

大鳥居を月はあまねく照らしをり記憶を殺す痛みやいかに

〔北限〕

の「大鳥居」は、歌人で国文学研究者でもある佐田公子氏が指摘するように、戦没者が眠る靖国神社を表現しており、先に挙げた「カナカナの」へと連接していくのであろう。擬人化された「大鳥居」の痛みは、栗木と「靖国神社」という視点も誘発するが、今は触れないことにする。

このように「復員兵」は伯父を象徴とするものである。さらに、重要な一首があるので、次に挙げたい。

ショーケースに白き布かけ灯を消せば繙帯の兵士ねむれるごとし

〔前に出ず〕

これは栗木自身が、子供の時、駅や神社などで傷痍軍人の人たちが金銭を乞う姿を見て怖かったという体験のもとに詠まれている。特に、「白い繙帯」「白い病衣」「白い義肢義足」が怖かったと言う。そして、兵士たちの無念は今でも、例えばデパートにも、息づいていると述べている。その兵士たちは、戦死した伯父でもあるのだろう。このように、栗木も追体験していると言えよう。また、歌に詠む「白」という色彩表現も看過してはならないだろう。

次に本歌集の一首を挙げる。

死のそのとき眼鏡をかけてゐたらうか戦に果てし伯父を想へば

〔曲線〕

この歌は連作となっているので、次に挙げてみたい。

汗まみれの夕日が森に沈む夏 負け戦負けつづけて死者たち

灯をともし潤子のやうな小さなランプ 富澤赤黄男

外に出ればすでに夕暮れ戦場の赤黄男に小さき潤子のありき

死のそのとき眼鏡をかけてみたろうか戦に果てし伯父を想へば

兵送るため旗ありきいのちより高きところに掲揚されて

断崖に咲く夏椿散るときは両手を挙げて水に散るらむ

亡き祖母の時計はめれば秒針は雪野をあゆむごとく動けり

〔曲線〕

この連作に共通するのは「戦争」である。一首目の「汗まみれ」の歌では、「夕日が森に沈む」が「敗戦」を、結句の「死者たち」が栗木の伯父のような「兵士たち」を表現しているであろう。栗木の伯父は南方で戦死したので、「森」は南方のジャングルをも表現していると言えるであろうか。「負け戦」であつても戦わざるを得なかつた兵士たち、死者たちの無念さが表出した一首であろう。二首目は、富澤赤黄男の戦争句を詞書に引用している。この歌については、拙論「栗木京子短歌における「引用」の意図と展開——「俳句」の引用を中心として——」（『解釈』第六五巻七・八号、令和元年八月）を参照されたい。そして、三首目の「死のそのとき眼鏡をかけてみたろうか戦に果てし伯父を想へば」では、戦死した伯父の最期を、伯父がいつもかけていた「眼鏡」を歌材に詠んだ。最期の時、伯父は「眼鏡」を通して何を見たのだらうか、と問いかける栗木の思いが表現されている歌である。また、「戦争」と「眼鏡」という意外な組み合わせが、生々しさを誘発し、「死」を際立たせ身近なものとしている。次の二首でも「兵士」と「死」について詠まれており、最後に子を待ち続けた祖母の歌へと還つていくのである。この連作からも、「戦争」「夏」「伯父」

「祖母」の強い関連性が認められるであろう。

次に第五歌集『夏のうしろ』から一首、第七歌集『しらまゆみ』（平成二年、本阿弥書店）の二首を取り上げる。いずれも「伯父」を連想させる作品となっている。

月の夜のジャンゲルジムよ南島に果てし兵士_しのてのひらが見ゆ

（「レモン」）

南島に果てにし兵_しも見てをらむ黒髪_{くろかみ}の国を照らす月光

軍服の内なる下着いかばかり汗ばみぬしか死にし兵士_しの

（「パンの耳」）

これら三首に共通するのは「夏」「月」「兵士」「南島」、そして「戦争」であろう。そして小題「レモン」には先にも述べた通り、「祖母」の歌が二首収められている。先に挙げた第七歌集『しらまゆみ』の小題「パンの耳」も連作となっているので、繰り返しとなるが次に挙げたい。

病院船にうめく人らを照らしたる月にてありや外_とに出_いでて見る

南島に果てにし兵_しも見てをらむ黒髪_{くろかみ}の国を照らす月光

軍服の内なる下着いかばかり汗ばみぬしか死にし兵士_しの

（「パンの耳」）

これら三首には「月」が共通している。そこで着目したいのが、先に述べた第五歌集『夏のうしろ』の歌「大鳥居を」

である。戦死した伯父が眠る靖国神社を象徴とする大鳥居を「月」が照らしていると詠んでいるが、先の三首にも「月」が詠まれている。この点からも作者には「戦争」と「月」を結びつけるものがあるのではないか。「戦争」「靖国神社」「月」は、栗木の戦争詠を掘り下げる時、重要な文言となろう。さらに、この連作では「夏」だが、次の二首では季節は「冬」となる歌がある。それが、

冬は来ぬ食券売り場に赤や黄の押ボタンあり輝きながら

吹き終へて子らが腕より垂らしもつりコーダーには小さき穴あり

(「パンの耳」)

である。先の「戦争詠」とは印象が変わるが、着目したいのは「赤や黄」「小さき穴あり」である。第五歌集『夏のうしろ』の小題「曲線」の「戦争詠」連作に、俳人富澤赤黄男の戦争句を引用した作品があった。それが次である。

灯をともし潤子のやうな小さなランプ 富澤赤黄男

外とに出ればすでに夕暮れ戦場の赤黄男に小さき潤子のありき

(「曲線」)

また、第五歌集『夏のうしろ』には、二〇〇一年アメリカ同時多発テロ関連の作品群が収められているが、その中に次の歌がある。

れんこんの穴とは十と数をへ了をへへ食めば殺戮ある世はいづこ

(「のりしろ」)

この歌は、主婦で料理好きな栗木が、料理や食べ物等を歌材とした作品の一つであり、「戦争詠」と結び付けて詠むのが特徴である。つまり、この歌では「れんこんの穴」から人を殺す「銃口」「弾痕」へと連想が及んでいるのである。「吹き終へて」子らが腕より垂らしもつりコーダーには「小さき穴あり」が連作と考察するなら、「穴」は、「れんこんの穴」と同様に「戦争」に結びつけることができよう。「戦争」を揺曳する作者の精神構造に注目する必要がある。

最後に第一〇歌集『ランプの精』の作品を挙げたい。

特攻機の名、敷島、大和、朝日 花見をしつつ伯父つぶやけり

(「数字の磁力」)

この歌に出てくる「伯父」は戦死した伯父とは違うようである。なぜなら、伯父が戦死したのは栗木が生まれる前で、先に挙げた第四歌集『万葉の月』で詠まれた祖母の歌、

子を幾たり無くせどすぐにまた産みて祖母の歩みし野あざみの生

(「官能ともる」)

から子供は数人いたからである。この歌で着目したいのは、特攻機の名前が本居宣長の「敷島の大和心を人間はば朝日にほふ山桜花」に由来するという点、栗木の歌に「引用」されている点であろう。「伯父」が花見をしながら特攻機の名前を思い出し、つぶやく姿に、栗木は戦争が人々に与えた影響の大きさ、根深さを認めたのではないか。

次に二首を挙げる。

仏壇の横にピッケル立てありき戦死せし伯父は登山好きにて

痩せ尾根に駒草の咲く立山を想ひたりけむ死にゆく伯父は

(「鯨とピノキオ」)

これらの連作から、戦死した伯父は「登山好き」であつたことが窺え、生きていれば伯父も登山を楽しめたであろうという無念さも認められよう。やはり、ここにも、「家族」「戦争」「夏」という要語が認められ、栗木の精神基底を形成している。以上が、「伯父」を詠んだ作品である。

五、「戦争詠」と祖父、叔父

次に祖父、叔父の歌三首を挙げる。まず、第五歌集『夏のうしろ』の二首である。

11月13日北部同盟の進攻によりカブール陥落

祖父に似る、叔父に似る人ら湧き立てりカブール陥落の土ぼこりのなか

少年兵百人処刑されしといふ 祖父に似る、叔父に似る人もあたらむ

(「虹の七色」)

この二首は、詞書にあるように平成一三年(二〇〇一)十一月三日、アフガニスタン首都カブールが陥落し、タリバン政権の事実上の崩壊を詠んだものである。本歌集は「社会詠」、特に戦争、テロ、紛争の歌が目立った歌集となっている。栗木は報道で、タリバン政権崩壊に沸く人々、そして処刑された少年兵という対比する両者を見て、出征し

た祖父、叔父の姿と重ねたのであろう。アフガニスタンと日本、過去と現在の戦争という異なる状況だが、そこにいるのは人であり、それは栗木の祖父、叔父であった可能性もある。遠い異国の出来事を自身に引き付けて詠む手法は栗木の特質であり、この二首にはそれがみごとに詠出されていると言えるであろう。

最後は第八歌集『水仙の章』の歌である。

軍隊にて覚えし気象学のこと叔父は語りき震災ののち (「ガリレオ温度計」)

歌に詠まれる「震災」とは、本歌集主題でもある「東日本大震災」のことである。この歌から、出征し、軍隊で覚えた気象学を「震災」後に姪に語る叔父の姿が見られる。この歌は「戦争」と「震災」が結びついた作品だと言えよう。やはり、「家族」「戦争」の連鎖はここでも認められる。以上が祖父、叔父の歌である。

六、「戦争詠」と子、家族

次に戦争の実体験がない家族(夫、子)を詠んだ作品を挙げる。まず、第三歌集『綺羅』(平成六年、河出書房新社)の一首である。

セルビアがボスニアにせし残虐をつぶさに読めり子を叱りし夜

(「水銀電池」)

この歌に詠まれている「セルビア」と「ボスニア」とは、「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争」(一九九二年～一九九五年)

を指す。当時、小学生の子育て中であつた栗木は、子を叱つた夜、「民族浄化」と呼ばれる残酷な行爲についての記事を読み、自身を顧みたのであろうか。同国の民だつたセルビアとボスニアの敵対、上下関係を知り、栗木はそれを「家庭」に置き換え、恐怖を感じたのではないか。また、本小題の季節に着目すると、「夏」の歌の存在に気付く。そこで本小題に収められた作品を次に挙げたい。

まつ顎より死後硬直は始まると光さかんなる楡にれの木仰ぐ

喜びに振る尾もたねばくるくとパラソル回し坂のぼりゆく

爪生おふる指こそ奇あやしと気付きたり川泳ぎより帰る道にて

白き傘ほそく巻き締めたたむとき少年たりしわが前世恋ふ

血のまじりあるやうな空なかなかに暮れず涼しきまま夏は過ぐ

闇空に鉦打つごととき遠花火川辺のまつりさびしかりけり

夏終はる机上に水銀電池あり海溝の冷えをぞくりと秘めて

セルビアがボスニアにせし残虐をつぶさに読めり子を叱りし夜

月光にしとどに濡る森の奥夜ごと木となりねむる蛇をり

風荒ぶ地上は揺るる鞆たばなり心の海が見えるまで漕ぐ

(「水銀電池」)

傍線にあるように、「夏」を連想させる言葉が詠まれていることが認められよう。しかし、言葉に着目すると、決して明るく爽快な夏ではないことに気付く。例えば、一首目「まつ顎より」では、夏の光を多く浴びた楡の木を仰ぎ、作者は「死後硬直」を連想し、「死」を感じるのである。これはやはり「死」が身近な医師の妻であることも影響し

ているのであろうか。他にも「パラソル」、「川泳ぎ」、「花火」等、やはり夏を連想させる歌はあるが、掲出歌「血のまじりあるやうな空」では、夏の夕空を「血」と表現している。次の「闇空に」でも、「川辺のまつりさびしかりけり」と表現している。そして、掲出歌「セルビアが」と「戦争」を詠むのである。これらの作品に認められるように、やはり「夏」は栗木にとつて「死」や「戦争」を連想させる季節と言えるのではないか。

次に第四歌集『万葉の月』の二首を挙げる。

犯人の少年はヒトラーに心酔してゐた。

『わが闘争』吾子も読みをり花柄のブックカバーにくるみ机上に

おびただしき美しきヒトラー・ユーゲント駅を出で進学塾へと向かふ

〔「ニュータウンの枕詞」〕

本小題にある「ニュータウン」とは、「神戸連続児童殺傷事件」（一九九七）が起きた「須磨ニュータウン」を指す。本事件発生時、栗木の息子も犯人の少年と同年代であった。『わが闘争』の歌は、息子が犯人と同じ本を読んでいることを知り動揺する母の心情が素直に読まれている。加えて、秩序に従い駅から進学塾へと向かう子たちと、ヒトラーを慕う青少年組織を重ねて詠み、子たちの将来を危惧している姿が認められよう。これらについて、連作の一首である

犯罪は社会の責任だと言ふけれど…。

試すには及ばず 人は壊れやすきものと少年に母が教へよ

〔「ニュータウンの枕詞」〕

を挙げ、佐田氏は次のように述べている。

人が壊れやすいものであると教えられなくなったのも、日本社会の病理である。その意味では、犯罪は社会の責任である。しかし、「日本の母よ、人は傷つき壊れやすいものであるとせめて教えよ」と詠わざるをえないのである。この頃、作者の子どもも親離れが始まって、寡黙であった。だから、当然、この叫びは、自己自身に向かつても発せられている。

このようないかんともしがたい事件を契機に、栗木は、社会詠を自身の身に引き寄せて、詠わざるにはいられない。常になくなっていく。常に生命の根源を宇宙規模で捉えられている栗木には、尋常ならざる社会現象を、詠わずにはいられないのである。⁽⁸⁾

傍線部にあるように、本連作は、栗木の特質である「社会詠」へ、さらに指摘すると「家族」を介した「社会詠」へとつながっていくものであると言える。

その例として、他にも次の三首を挙げる。

第五歌集『夏のうしろ』

背伸びして柵より大皿取り出せるをさな児の見ゆ日本は平和か

(「普段着」)

第七歌集『しらまゆみ』

徴兵のなき世に男の子産みし幸おもへと肩にさくらふりくる

(「しらまゆみ」)

第一〇歌集『ランプの精』

デパートにて

自衛隊も使用、と書かるる鞆あり子に贈らむとしつためらふ

(「鯨とピノキオ」)

これら三首は、「子」を介して「社会」を詠んだ作品、特に「戦争」と関係があると言つてもよいであろう。一首目は「戦争」だけではなく、子供が生きている現代社会についての歌でもある。そして、第五歌集『夏のうしろ』は本小題から始まり、次の連作が収められている点にも着目したい。

加藤典洋『敗戦後論』

八月の空縫ひあはせ飛ぶ鳥よ戦勝国に戦後はあらず

公報が人の死告げに來し夏の野原を過ぐる風しろかりき

武器回収されたるのちは農機具もて殺し合ふなり隣人なれば コソボ紛争

(「試し刷り」)

このように「戦争」について詠んだ小題の次が、小題「普段着」である。本小題は次の連作が由来である。

昭和三十五年、社会党委員長浅沼稻次郎氏は十七歳の少年に刺殺される

主義のため人殺したる少年は学生服着てゐたりき哀し

そして平成十二年、十七歳の少年が…

普段着で人を殺すなバスジャックせし少年のひらひらのシャツ
コイン投げて手の甲に受く 思春期の自傷と他傷は同じと言へど
被害者の葬りに集ひ来る人はみな喪服着る学生服着る

(「普段着」)

これらで栗木は、主義主張のない犯罪、子と同年代の少年による犯罪が増えている現代日本は、本当に平和なのか、戦争がないだけで平和とは言えないのではないかと指摘している。その危うさについて、「子」を介し詠んでいるであろう。

次の「徴兵の」と「自衛隊も」の二首は同じく「自衛隊」と「子」について詠んだ作品である。

海賊対策のためソマリア沖に海上自衛隊派遣

海賊の制圧のためと言はれるれば武器をうべなふわれこそ恐し
徴兵のなき世に男の子産みし幸おもへと肩にさくらふりくる

(「しらまゆみ」)

デパートにて

自衛隊も使用、と書かるる鞆あり子に贈らむとしつつためらふ

(「鯨とピノキオ」)

栗木は、これらで「自衛隊」と「子」について詠んだ。さらに、もし、現代の日本に「徴兵」があったら、息子は伯父たちのように出征し、自身も祖母のように「陰膳」を供えるのであろうかと自問する栗木の姿が表現されている。

そして、「武器」「戦争」と関連がある「自衛隊」が使用している鞆を果たして信頼しているのか、我が子に贈っているのか、と「母」である栗木が悩む姿が窺える。このことから、「国」や「政府」に対する信頼が揺らいでいることを表現する一首であると言えるのではないか。

最後に「家庭」を歌材とした連作を第五歌集『夏のうしろ』から挙げたい。

地図ばかり並ぶギャラリー侵略はつねに美しき輪郭もつ

舌先にしらべさやかなシエラレオネ世界一寿命のみじかき国よ
避難所を収容所と言ひたがへたるニュースを見つつ団欒にをり

家庭とはたとへば野戦病院か月夜のこころにガーゼ当てつつ

（「秋の舟」）

二首目では、西アフリカの国シエラレオネの情勢を詠む。世界最貧国の一つで、歌にあるように「平均寿命」が世界一短い。シエラレオネ内戦（一九九一～二〇〇二）によって、約二五〇万人の避難民が出たとされ、栗木は、家族とその報道を見ていたのであろう。ニュースで「避難所」を「収容所」と伝えたことが、栗木の記憶に残ったのか。佐田公子氏は、掲出歌について、「アウシュビッツ収容所が読者の脳裏に走る」と述べる⁹。佐田氏が指摘するように、本来、避難民たちが入る場所は「避難所」であるが、激しい内戦から逃れ、強制的に入所した場所を「収容所」と表現したニュースに、栗木は強い違和感を覚えたのであろう。ニュースを見ている栗木とその家族、そして避難所で暮らす家族の現実の違いを認識した。しかし、栗木はそれだけでは終わらず、自らの家庭を顧み、歌に詠む。それが「家庭とは」の歌である。栗木は「家庭」とは「野戦病院」のようだと喩える。それは、例えば、青白く病んだ孤独な心情にガーゼを当てる（治療）のが家庭の役割ではないかということか。実際の戦場とは異なるが、日々の生活で精神的に

も肉体的にも負傷することは多い。その傷を癒すのが「家庭」ではないか、と栗木はシエラレオネ内戦の報道を通し、自己に引き付けて詠んでいるのである。この点からも、栗木にとって「戦争」と「家族」は密接に関係していると言えよう。

七、おわりに

以上、栗木短歌の「戦争詠」と「家族」を考察する一助として、全歌集の「戦争詠」の解釈を踏まえ分析し考察を行った。最後に、考察の結果、明らかになったところを整理しまとめてみたい。

構成として、本稿では、過去の「戦争」を体験した家族（祖母、父母、伯父）と、戦争の実体験がない家族（夫、子）に分けた。

まず、「祖母」を詠んだ歌には、戦死した息子（栗木の伯父）への想いが強く表現されている。

それは、出征した子の無事を祈り、陰膳をし、その後戦死した子の死を弔う姿に認められる。さらに、「祖母」の歌からは、同じ息子を持つ栗木自身が、戦中戦後を生きた母たちに共感し、敬う姿も明確に表出していると言えよう。「祖母」を詠んだ作品群に共通するのは「戦争」「夏」「雨・水（涙）」である。注目したいのは、第一〇歌集『ランプの精』の一首、「戦死せし子に陰膳を今もなほ供へゐるべしあの世の祖母は」である。この歌は、出征した子に陰膳をし無事を祈った祖母の姿、さらにこれは推測ではあるが、祖母は敗戦後も戦死した子の陰膳を続けていたのではないかと詠んでいる。つまり、戦争は終わったが、子を亡くした祖母にとっては続いていたのではないかということである。そして、現代に生きる栗木は、「戦争」は過去のものではないと表現しているのではないか。戦争という名ではないが、現代の日本でも常に問題はあり、戦争につながるのではないかという不安な状況は世界中に存在している

と詠むのである。

次に「父母」の歌では、出征し帰還した「父」と「戦友」との関係を「娘」の視点から詠んだ。「父」にとつて「戦争」を共に戦った友人は絶対的な存在であるが、「母」は快くは思っていない。「戦争」に対する「父母」の対比を印象的に詠った作品と言えよう。一方、「母」にとつて「戦争」とは、戦死した「兄」を思い出すものでもある。認知症の悪化で記憶を失いつつある母が、夏の夕暮れに「靖国に兄があるから」と言うのである。つまり、「母」にとつては、「戦争」は過去のものではないのである。その「母」の兄である「伯父」は、本稿冒頭でも述べたが、栗木の「戦争詠」にとつて重要な存在であり、発端でもある。そのため、栗木が詠む「戦争詠」には必ず「伯父」の姿が存在している。例えば、「復員兵」「兵士」「死者たち」は、「伯父」へとつながる言葉であると言えよう。それは、同様に出征し復員した「叔父」も同様である。その一例として、平成一三年（二〇〇一）のアフガニスタンの作品がある。遠い地の戦いを映す中に、栗木は「叔父」や「祖父」の姿を重ねるのである。そこには、「自己」にひきつけて「社会詠」を詠む栗木の「特質」が明確に認められよう。

以上、「祖父母」「父母」「伯父」「叔父」の作品から、栗木にとつて「戦争」とは過去ではなく、現在へと連接していると言えるのではないか。その結果、栗木は自身の家族（夫、子）、さらに自身をも「戦争詠」の中で詠み続けていると言えよう。

以上、栗木京子短歌にみる「戦争詠」と「家族」の関係について考察を重ねてきた。最後に、小考を整理すると次の三点となる。

- ① 栗木の「戦争詠」は、「家族」を介して詠まれ、「家族」が原点となっている。また、身近な家庭生活の中から「戦争」を捉え、その現実を凝視している。
- ② 栗木は「戦争」を詠ずるにあたって、「戦争」と真摯に対峙して、現実においてそれを体験しようとしている。
- ③ 栗木の「戦争詠」にはいくつの特徴があるが、季節では「夏」、色彩では「白」の表現が多い。

以上の三点をまとめとしたい。

註

(1)「戦争詠」については短歌辞典等での明確な定義(時代や視点等)はされていない。例えば、社会学者で歌人でもある大野道夫氏は、自著『短歌・俳句の社会学』(平成二〇年三月、はる書房)で「短歌・俳句の題として、戦争は重要な題の一つである。すでに万葉集の昔から戦争はうたわれてきた。」と述べている。また、大野氏は、自著で「戦争詠」を「戦争(第二次世界大戦)」を詠んだ作品」と定義付け、戦後の朝日歌壇・俳壇の作品分析を行った。その結果、①「戦争詠」は俳句より短歌に多いこと、②「戦争詠」では、戦争体験を詠んだ作品が短歌では三割、俳句は二割だったこと、③鎮魂の作品が短歌・俳句ともに二割程度、④時代の経過とともに「戦争詠」が多様化していること、例として、戦争加害者の視点、世代間に起こる日本人の戦争観の違い、戦争肯定の視点などを挙げている。さらに歌枕として「広島」「長崎」、季語としての「敗戦忌」「原爆忌」が定着しつつある現状も紹介している。さらに、これらの歌枕、季語を駆使しつつ、戦争体験を詠み継ぎ、死者を鎮魂しつづけることは、忘れてしまいがちな短歌・俳句の機能としてきわめて重要であり、またそれはすでに戦後生まれ新しい伝統として、定着しつつあるのではないかと指摘している。

なお、本稿での「戦争詠」とは、「第二次世界大戦」だけでなく、一九四五年の戦後以降、現在も世界で起きている「戦争」も含むという位置づけであることを述べておきたい。

- (2)「日本大百科全集」の「梶子」の項(担当 小林義男)を参考にした。
- (3)『日本国語大辞典』の「梶子」の項を参考にした。
- (4)伊藤一彦×栗木京子「訳のわからない自分を」(『シリーズ 牧水賞の歌人たち』vol.10 栗木京子、平成二六年一二月、青磁社) 六二、六三頁。

- (5) 「編集長インタビュー（135）／栗木京子」（『短歌往来』平成一五年一二月号、平成一五年一月、ながらみ書房）二六、二七頁。
- (6) 佐田公子 『栗木京子の作品世界』（平成二〇年、短歌研究社）三三二頁。
- (7) 栗木京子 「自歌解説 私の心に残る歌」（『短歌』平成一七年五月号、平成一七年四月、角川書店）一一二頁
- (8) 註(6)に同じ。二七二、二七三頁。
- (9) 註(6)に同じ。二九三、二九四頁
- (10) 自身の詠については、別稿で述べる。